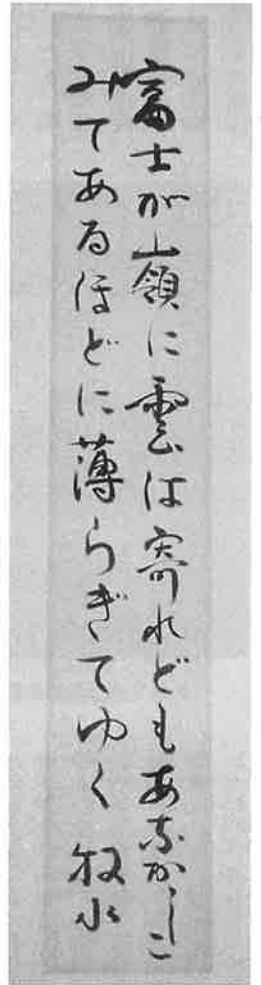


沼津市 若山牧水 記念館

第27号 2001.10.10

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX (0559) 62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 E-mail:bokusui@thn.ne.jp



富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこ みてあるほどに薄らぎてゆく 牧水

大正九年八月十五日に念願の田園生活を求めて沼津町在の楊原村上香貫に移ってからの牧水は、香貫山、愛鷹山から静浦の海岸、そして裾野から須山あたりへ何回か足を運んだ。大正九年十月九日から十一日に至る旅と大正十一年六月の須山から印野を歩いた旅が、それぞれ紀行文「富士裾野の三日」(「静かなる旅をゆきつつ」所収)、「大野原の夏草」(「みなかみ紀行」所収)として残されている。この「富士が嶺に」の歌は、第十四歌集「山櫻の歌」の「大野原の秋」と題する九首の中の一詩であり、この作品群は、大正九年の「富士裾野の三日」の際の作品であろう。

牧水のこの旅は、沼津から汽車で御殿場に出て、須山の清水館に一泊。十里木に出て、勢子辻から大坂を経て富士宮に降りる旅であった。大野原は御殿場から須山に至る高原地帯。かつては村人たちの入会の原であったが、現在では東富士演習場として自衛隊および米軍によって使われ、時に大砲の音が轟く富士の裾野の広大な芒の原。「富士裾野の三日」でも当時の大野原を「道幅は意外に廣く、且つ眞直ぐであつた。そして大きい轍の痕が一尺二尺の深さで掘られてゐるのを見るとこの邊にあると聞いた砲兵隊の道路である事が解つた。」と書いていて、この時既に軍の演習地になっていたことが判る。砲兵連隊の青年との出会いも書かれているが、大野原については「あたりの野は大抵草原のまゝであつた。芒が大方で、その間に松蟲草が咲いてゐた。耕された所には

必ず桑と玉蜀黍とが一緒に作られて、桑はまだ青く、玉蜀黍は葉も幹も枯れてゐた。」ともある。須山・十里木から勢子辻あたりの様子も活写されていて懐かしい。

かの著名な「駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山」は、沼津に移った九月半ばに自宅前から見た富士を歌つたもので、この紀行文の冒頭部分におかれている。そして、この旅の途次、「大野原の秋」九首が生まれたのである。

富士が嶺や裾野に來り仰ぐときいよよ親しき山にぞありける
富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこわがみてをれば薄らぎてゆく

と歌う。「あなかしこ」は感動の極致からの言葉であろう。歌集では「みてあるほどに」が「わがみてをれば」となっている。

沼津牧水祭前祭で毎年歌われる

なびき寄る雲のすがたのやはらかきけふ富士が嶺の夕まぐれかな

も一連の中の作品である。

この軸は沼津市大岡木瀬川の潮音寺住職水野秀和氏から寄贈されたもの。本体の短冊は薄い紅の地に、生真面目な文字で力強く書かれている。小品だが、大事に軸装された心意気もふくめて觀賞して欲しい。なお、潮音寺は頼朝にまつわる伝説の亀鶴觀音がある寺として知られ、水野氏は小学校の教師として片浜・金岡・静浦東・大岡・第三・門池小と歴任した。(須永秀生)

二十一世紀に語りつぐ系譜

牧水と海人 岡野久代

大正14年秋
24歳の明石海人

去る七月五日、悲願の明石海人歌碑が沼津千本浜公園に聳える太郎松の前と沼商(県立沼津商業高校)校庭に建立された。沼商同窓会が中心となり設立された明石海人顕彰委員会が、生誕百年を迎えた偉大な先輩を顕彰する事業として企画したものであった。振り返れば、「明石海人を偲ぶ会」(沼津牧水会理事川口和子氏の呼び掛け)の提案による「明石海人文学展」(沼津牧水会主催・沼津市教育委員会後援)が開催されたのは、九年前(平成四年六月九日〜七月五日)のことである。その年からほぼ四年を経て「らい予防法の廃止に関する法律」が施行されたが、定期的にこの文学展の内容は制約を受けざるをえなかった。歌碑の設計案まででき、碑石は岡山県の長島(国立療養所長島愛生園所在地)から頂戴したいという希望を誰とはなしに話題にしていたと記憶している。「偲ぶ会」に和服姿で現れる沼商OBの故佐



邑久長島大橋「人間性回復の橋」

藤英之助氏は、初めの頃の静々とした様子から次第に熱くなつていき、相当な募金目標を掲げていた。碑面に刻む歌のトップは「ゆくりなく映畫にみればふるさとの海に十年のうつろひはなし」であった。この歌は明石海人顕彰委員会の選歌の際に、千本浜公園に相応しく且つ一般にわかりやすい歌であることと、沼津牧水会に敬意を表す意味も込めて四基中の一基に刻むことになった。

朝日新聞社が海人の收容先の国立療養所長島愛生園を慰問したのは昭和九年十月十八日のことである。歌集『白描』の詞書によれば、この歌は慰問のトーカーニュースを見た海人の感動を詠んでいる。昭和七年十一月、意識不明のまま長島愛生園に運ばれた海人は、療友たちの献身的な介護に支えられ、やがて半年後に精神錯乱状態が安定し、翌年秋には光が丘の神秘体験によって恢復したと言われるが、收容から二年の歳月が流れようとしていた。

しかし、精神は平常にもどつたと言われたものの、『病中日記』(昭和九年)の六月三日の記述によれば、光彩炎で眼が真紅に充血して発熱した模様である。同日の日記に「日は暮れて道遠しの感に堪えない。もう十年生きたら、歌も句も相当な処まで進むだろうと思ふが……。だが、六尺の病床を天地として、あれだけの仕事をなしたげた子規の事を思ふと、うか／＼しては居られない気がする。生くる日の限り、日に新に日に日に新に成長してゆきたいものだ。」と記し、七月十七日には「生きてゐるうちに歌集位出す様になりたいと思ふ。この頃になつて命が惜しくなつて来た。」と吐露している。八月三日あたりから発熱の日が多く、十二日も十三日も眼痛に苦しみ、日記は十三日の「眼やはり痛む。」の記述を最後に終わっている。

昭和九年三月『愛生』に「追悼歌」を発表して以来、文学の創作は続行されるが、発熱を繰り返して眼痛に苦しんでいた様子から病状は確実に進行していたようである。従つて、隔離の療養所で失明の危惧に暗澹たる思いでいた海人は、このトーカーの映画に写された故郷の風景を歌わずにはいらなかったであろう。私も幼い頃、根上り松の老樹を



千本浜公園に建立された海人の3基の歌碑

遊び場にした一人なので、海人のこの歌を口吟む時、昔の千本松原の風情が臉に甦るのである。そして同時に大正十五年『沼津日日新聞』と『時事新報』（東京）に千本松原伐採計画反対の意見を投稿し、苦手の演説までして千本松原の危機を訴えた牧水の姿が神々しく浮かんでくるのである。

一方、海人は「社会と自分」（『海人全集』下巻所収）の中で生命について次のように述べている。

我々の衣食住の為に費す何千万億ともはかられぬ動植物の生命―殺物の、野菜の、材木の、牛馬羊豚の鶏や魚の生命の凡てに靈魂はないものであらうか。それ等にはなくたゞ人間にのみありと云ふは余り虫のよい己愆ではあるまいか。（中略）この世は人類のみの為に作られ、人間のみが靈魂を持ち永遠の生命を受けるとは甚だしい独断ではなからうか。

牧水の森林観と海人の生命観とは、底流において同一の思想である。駿河の海と千本松原をこよなく愛した二人の愛すべき歌人は相見ることにはなかったものの、次の歌を並べてみると、そこに系譜として認められるテーマが存在する。

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の窓
しかりけり
シルレア紀の地層は杳きそのかみを海の蠍の我
も棲みけむ
若山牧水
明石海人



歌碑除幕と同時に沼津市民文化センターで開催された「明石海人生誕百年記念文学展」

二〇〇一年の夏の夕暮れ、千本浜の砂利と砂に続くスロープに座りながら語らっている牧水と海人を想像するのは、私の過剰な思い入れであろうか。牧水の最晩年、若山家に住みこんで雑誌『創作』や『詩歌時代』の発行を手伝った牧水の愛弟子、大悟法利雄氏が改造社出版部において、歌集『白描』の出版担当者になっていたという事実も不思議な縁といえる。



『海人全集』全3巻(皓星社・平成5年)

筆者プロフィール

日本大学短期大学部講師 国際関係博士
沼津市生れ。県立沼津東高卒。日本大学大学院国際関係研究科において、石川啄木伝記研究の第一人者岩城之徳文学博士に師事し、明石海人研究を志す。『大学院論集』、『三島文芸』に論文を発表。『海人全集』共編。「文芸三島賞」「日本比較生活文化学会賞」受賞。日本比較生活文化学会理事。国際啄木学会会員。沼津文学祭懇話会委員。NHK第一「作家を語る」において明石海人を語る。

明石海人の歌碑建立によせて

(社)沼津牧水会理事 八十濱 俊一

去る七月五日、千浜公園に明石海人の歌碑が建立された。除幕式に際して、明石海人顕彰委員会の大井一郎会長は「我々の先輩である野田勝太郎さんを今日から明石海人と呼ばせて戴きます。明石海人さん お帰りなさいませ」と挨拶された。この言葉は私の心を揺さぶり、会長の姿がしばしあらずんだ。

歌碑建立の話が出て十年の歳月が流れ、その間に世の中は大きく変化し、「癩予防法」は廃止された。熊本地裁は「過度に人權を制限した癩予防法は違憲」との判断を下し、小泉総理は「控訴断念」を表明。「国家賠償」へと一歩踏み込んだ。時を得た歌碑建立であり、その意義は深い。

私の手元に一枚の絵皿がある。そこには「人間性回復の橋いまここに 本田稔」と焼き付けられている。十年前「明石海人文学展」準備のため長島愛生園を訪ねたとき、帰りがけにお会いした本田さんは、喉頭ガンの手術をされ食道発声でお話をされた。短い会話の中に想像もできない苦しかった過去の歩みと、明日に向かう意欲を知ることができた。今は亡き人になってしまった彼が記した「人間性回復の橋」は、本土と長島を隔てること僅か三十メートルの海峡に架かる橋だが、この海は多くの患者の孤独と悲しみと無念の涙を呑み込んで来たのである。本田さんはこの邑久長島大橋を「人間性回復の橋」と呼んだが、彼はこの橋を渡って故郷で生活する事なくその生涯を閉じた。本田さんばかりか療養所の大半の

方々の、親兄弟・親戚・故郷の人々への思いは消えることなく今も続いている。「国家賠償」がなされても、隔離政策によって生み出された偏見差別によって受けた傷は、時間を取り戻す事が出来ないように、消すことは出来ないであろう。それほどハンセン病に対する偏見差別の歴史は重い。この現実を直視することから「明石海人」の事に関わらざるを得なかった。「かわいそうに」と言う同情からは決していい関係は生まれない、自分が変わらなければ、とも考えた。しかし、人間の本性はそう簡単に変えられるものではない。「人間性」を「回復」しなければならぬのは、実は私自身であることに思いを致し、私の大きな課題となった。

この十年間、歌碑建立計画の中で数々のことが思い出される。「善かれ」と思つて計画したことが、視点を変えれば「迷惑」になり、「話せば理解してもらえぬ」と思えば、そこには越えてはいけぬ淵があり、事の重大さに立ち止まった。「無理をしてはいけない」と自分に言い聞かせながら七年を経過したころであった。沼商同窓会の皆さんが、創立百周年記念事業の一環として「明石海人の歌碑建立」を決め、着々と準備が進められた。関瑞穂さん(明石海人の長女)とも連絡が取れ、歌碑建立についても快諾が得られたという。「明石海人顕彰委員会」が発足し、歌の選定等が行われた。沼津牧水会から須永秀生氏(沼商出身)、明石海人の研究者である岡野久代さん、そ

して私が顕彰委員会のメンバーとして加わった。「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」とは聖書の言葉であるが、まさにその「時」こそ今であると確信させられた。

長島愛生園を訪ねたとき、さまざまな句碑・歌碑等が目立ったが、聞けば島からは「石」がたくさん出ると言う。「その石で、沼津に明石海人の歌碑を建てれば、終焉の地長島と出生の地沼津が深く結ばれる」と考えた。それも難無く実現してしまつた沼商同窓会の実行力には脱帽である。

除幕式の当日、関瑞穂さんはお出でにならなかつたが、事前に歌碑もご覧になり、文学展にも足を運ばれ、思いがけない出会いもあつて長年のわだかまりも消えた。関信之さん(瑞穂さんのご子息・海人の孫)は除幕式に参列され、喜びと感動の一時であつた。明石海人生誕百年に当たり「海人をふるさとに迎えて」歌碑が建立されたが、これですべてが終つた訳ではない。この歌碑を「人間性回復の歌碑」として、広く深く建立の意味を世に伝えて行きたいものである。

前号で取り上げた「牧水十三回忌記念寄せ書き」の解説で左下の一人が不明と書いたところ、群馬県立土屋文明記念文学館の神保昇一さんから、「圓吉」と読み、人見東明ではないか」との連絡を頂いた。当日の二次会開催発起人の一人である人見東明の名前がないことを不思議に思つていたが、浅学の悲しさであろうか。人見東明は岡山県生れの詩人で、牧水と同じ早稲田大学の出身。相馬御風・三木露風らと早稲田詩社を興し、解散後に自由詩社を結成。初期自然主義詩人として知られる。なお、題字は土岐善麿ではないかとの指摘も頂いた。慎んで訂正し追記する。

(須永秀生)